

自ら問い、自ら導く学生たち



中学生のときに同居していた祖母ががんを患い、自宅で緩和ケアを受けたことが医師を志すきっかけになった。「安らかに最期を迎えたいという祖母の願いを汲み、私たち家族のことも常に気遣ってくれる在宅医の先生の人間性に強く感銘を受けたと同時に、緩和医療の重要性を肌で感じました」と語る。しかし、「学生のうちは視野を広く持って、自分の進路をきちんと見定めたい」との思いから、現在、留学生活に準ミス日本としての活動と、分野を問わずさまざまなことに挑戦している。

Eriko Tanimoto

谷本英理子さん

医学部医学科4年

医学科4年の谷本英理子さんは、現在、プロジェクトセメスターで米国ネバダ大学リノ校医学科に留学している。分子細胞生物学の研究室に所属し、研究生生活を送っているところだ。

「こちらに来て約2カ月、自分の考えを英語で素直に発信できるようになったことは大きな変化です。同世代の学生たちとも他愛のない会話を楽しめるようになりました。彼らの独立心やセルフマネジメント力にも感化されつつ、西海岸特有のリラックスしたライフスタイルや価値観に触れたことは、留学生活で得られた何よりの財産です」

将来は海外で働くことも視野に入っており、大学入学前から留学を志していた谷本さん。TOEFLスコアアップや英検1級取得など、語学力向上のために努力を積み重ねてきた。1年次には、グローバルリーダー養成プログラム「HSLP（ヘルスサイエンスリーダーシッププログラム）」1期生にも選拔された。

「HSLPは、留学への第一歩として応募しました。それ以外にも交換留学生のサポートボランティア、英語のプレゼン大会などに参加し、英語による思考力や国際的な視点が身についたと思います」

語学力を活かして
国内外で広く活躍できる
医師になりたい



昨年は、『第48回ミス日本コンテスト2016』に出場。2016年の準ミス日本に選ばれた。

「医師は、専門性と広汎性の両方が求められる職業だと思います。これから臨床実習、卒後研修を通じて専門性を突き詰めていくことになりま。一方で、将来、向き合っていくのは、多様な価値観を持つ患者さんです。学生のうちに医療以外の領域でも世界を広げたいと考えました。現在は、準ミス日本としてさまざまな啓発活動や国の行事に参加

し、医療、政治、文化などさまざまな分野の方と交流しています」

帰国後に待っている新しい経験、そして、医師としての将来を思うと、夢はますます膨らむ。

「留学経験や語学力を生かしてWHOなどの国際機関で働くことは目標のひとつですが、緩和医療や小児科にも魅力を感じています。意義ある留学生活を送ることで、医学の勉強、準ミス日本の活動全てががつながって将来に生かされるのではないかと思います」

